サミズダートとインターネット：ナターリヤ・ゴルバネフスカヤの LiveJournal[1]

中 野 幸 男

はじめに

本論で扱うナターリヤ・ゴルバネフスカヤは 1960 年代には反体制運動の旗手として知られ，西側で広く読まれた『現在の出来事の記録』の編集に携わり，晩年には LiveJournal によるオンラインの記録を続け，ブログの更新を死の直前まで続けていた。60 年代の反体制運動はペレストロイカ期にも，2010 年以降もある種の模範として語り継がれてきた。一方，二つの時代の間にはメディアの進化があり，「インターネットはサミズダートのメタファーである」というインターネット以後に出現したロシアでの議論があった。また「ソ連におけるインターネット開発」に関する研究も存在している。1960 年代の証言者である詩人・編集者のナターリヤ・ゴルバネフスカヤは 60 年代のサミズダート編集者として伝説的な作家の一人であった。

サミズダートからインターネットに至る反体制活動とメディアの変化を見ながら，ナターリヤ・ゴルバネフスカヤを例として現代作家のインターネット以後の創作について考察する。

1. ゴルバネフスカヤの回想

ゴルバネフスカヤは 1936 年 5 月 26 日にモスクワで生まれ，2013 年 11 月 29 日にパリで亡くなった。[2] 2008 年に『非常用ストック』（«Неприкосновенный запас»）誌に掲載されたゴルバネフスカヤの経歴は以下のように書かれている。[3] モスクワで司書，

---

[1] 本論は 2014 年 12 月 4-5 日にロシアのペンザで開かれた国際会議「ジャーナリズムと文化」における発表および論集に出版された「Интернет и диссидентство 1960-х гг. в России: Наталья Горбаневская в Живом Журнале」および 2014 年 12 月 18 日に北海道大学・ユーラシア表象研究会における発表「インターネットとロシア 1960 年代反体制運動：LiveJournal のナターリア・ゴルバネフスカヤ」を基に，論文から 5 年経過した現在の状況を考慮し，加筆修正した論文である。

[2] *Б.п.* В Париже скончалась Наталья Горбаневская. [http://ru.rfi.fr/frantsiya/20131129-v-parizhe-skonchalas-natalya-gorbanevskaya] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[3] *Горбаневская, Н.* Легенда нашей демонстрации: сорок лет спустя // Неприкосновенный запас.

翻訳家，タイピスト，作家，サミズダートの編集者として働き，1968 年 4 月に『現在の出来事の記録』誌の最初の編集者となる。同年 8 月 25 日にはソ連軍のチェコスロヴァキア侵入に対する赤の広場でのデモに参加する。多くの参加者が逮捕される中でデモ終了後も彼女は自由な身であったために『真昼。赤の広場でのデモ関係文書』を編集した。ロシア語版は 1970 年に出版社「ポセフ」より出版された。フランス語，英語，スペイン語，ポーランド語版も出版され，2007 年にはロシア語改訂・追補版が出版された。1969 年 12 月に逮捕され「ものぐさ統合失調症」（вялотекущая шизофрения, sluggish schizophrenia）のために責任能力がないと認められ，強制治療のためにカザン精神医学監獄（「特別精神病院」）に移送される。1972 年 2 月に釈放，1975 年 12 月に二人の息子と共に亡命し，1976 年 2 月よりパリ在住。雑誌『コンチネント』編集部で働き，1988 年まで『ラジオ・リバティ』の嘱託職員，1980 年初頭から 2003 年まで新聞『ロシア思想』で働き，1999 年よりワルシャワのロシア語雑誌『新ポーランド』で編集部メンバー兼編集委員をしていた。1973 年の『岸辺（Побережье）』から 2006 年の『ティーローズ（Чайная роза）』まで 15 冊の詩集を出版し，ポーランド詩・散文・評論の翻訳，チェコ語からヴァツラフ・ハヴェル，フランス語からクロード・シモンなどを翻訳した。

また独立新聞によれば，1975 年にゴルバネフスカヤがソ連を去り，パリに居を構えると，アメリカの歌手ジョーン・バエズはゴルバネフスカヤに『ナターリヤ』という曲を捧げ，1976 年に初演した。[4] 死の 3 ヶ月前，1968 年 8 月 25 日の 45 周年を記念して赤の広場で 2013 年 8 月 25 日には反体制グループの行動に参加し，10 名逮捕されたが彼女は逮捕されなかった。[5]

1968 年 8 月 25 日にゴルバネフスカヤは赤の広場に飛び出し「あなたたちとわたしたちの自由のために」と書かれたバナーを掲げた 7 人のデモ参加者の中では唯一逮捕を免れた人物で，乳母車に生まれたばかりの息子ヨシフを連れていた。シングルマザーの家庭で育ったゴルバネフスカヤは，自身もシングルマザーとして子供を産んだ。[6]「私は父なしで育った」と語り，「私の父はユダヤ人で，彼の家族は少しだけ知っていたが，彼自身とは面識はなく、彼は前線で戦死した」とも語っている。[7] 出産につい

2008. № 4 (60). С. 170-171.

[4] Там же.

[5] Там же.

[6] *Горалик, Л.* (12 августа 2011 г.). Наталья Горбаневская: "Вот я дура была без страха" [http://os.colta.ru/literature/events/details/32573/page4/] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[7] Там же.

ては以下のように述べていた。

> 私の母が二人の子持ちのシングルマザーだったので，それはあまり気にならず，そういうものだと思っていた。だから思っていた通りに出産した。ヤーシクの名前は出産の 2 年ほど前に考え出した。当時の私は男の子が生まれたらヤロスラフ，女の子が生まれたらアンナにしようと考えていた。その次にオーシカが産まれる頃，私は女の子だろうと思っていて，その時にはもうアンナではなくアレクサンドラを考えていた。男の子の名前はどうしても浮かばなかった。彼が生まれた時には，名前をつけることがどうしてもできなかった。座っていると，友達が「何かユダヤ的ないい名前をつけてやろう。マルク，ヨシフあるいはダヴィド」と言う。それで私は三つのうちからヨシフを選んだ。[8]

ヨシフは 1968 年 5 月 14 日，彼女の 32 歳の誕生日の 12 日前に生まれた。[9] その 3 ヶ月後にゴルバネフスカヤは赤の広場に立ち，生後 3 ヶ月のヨシフを乳母車に乗せていた。ゴルバネフスカヤの死後に公開されたキリル・サハルノフ＆クセーニヤ・サハルノヴァのドキュメンタリー映画『ナターリヤ・ゴルバネフスカヤ　わたしはヒロインではない』(Кирилл и Ксения Сахарновы «Наталья Горбаневская: «Я не героиня»» (2016))では，二人の息子ヨシフとヤロスラフがパリのペール・ラシェーズ墓地にある母の墓を訪ねている。映画の中でゴルバネフスカヤはモスクワ時代のアパートを訪ね，そこに現在住む一般人の住人と会話し，その中で過去にゴルバネフスカヤという人が住んでいたという話が出ると自分が本人であることを教え，相手の反応に満足するシーンがある。映画でゴルバネフスカヤは，精神科医で，マンデリシュターム研究で知られる文学者でもあるユーリー・フレイディンと共に精神病院のあった場所を訪ねている。パリ亡命後は『コンチネント』編集部で働き，実質的にセルゲイ・マクシーモフと二人だけで編集していたことや，ヨシフ・ブロツキーのノーベル賞受賞にあたって『ロシア思想』の記者としてストックホルムを訪ねていたことが語られている。

1976 年 2 月 29 日のニューヨークのロシア語新聞『新しいロシアの言葉』に，フランスの雑誌『マッチ』に掲載されたソ連からウィーンに到着したばかりのゴルバネフスカヤへのエヴゲーニー・シリャノフの会見記事が抄録で転載されている。[10]

---

[8] Там же.
[9] Там же.
[10] *Б.п.* Дело Наталии Горбаневской // Новое русское слово. 29. 02. 1976. С. 2.

> 1972 年 2 月 23 日のある素晴らしい朝，ゴルバネフスカヤ のところに精神病院の職員たちがやってきて彼女は母親が待っていると伝えられた。翌日には彼女はモスクワにいた。亡命するために彼女はさらに三年待った。彼女はユダヤ出自であったので，イスラエルに亡命するように求められた。[11]

1967 年にロシア正教に改宗したので自分はユダヤ人ではなくロシア人だと語っていたゴルバネフスカヤは，イスラエルのビザを申請し，ウィーン経由でパリに亡命した。[12] パリでは『コンチネント』および『ロシア思想』といった編集部で勤務した。ゴルバネフスカヤによれば『ロシア思想』に呼ばれた際に，編集長のマクシーモフに連絡したら祝福してくれたので，両方の編集部で並行して働きはじめ，『コンチネント』でもモスクワに移動するまで働いたと述べている。[13]

2．60 年代のリバイバルとしての現代

アレクサンドル・ゲニス＆ピョートル・ワイリ『60 年代』では 1960 年代とペレストロイカ期が重ね合わされ,「私たちはこれまでほとんど全てのペレストロイカ期の革新の源泉を 60 年代に見つけている」と述べられている。[14] プッシー・ライオットのマリア・アリョーヒナの手記においても 1968 年のゴルバネフスカヤたちの反体制活動とプーチン政権下の 2010 年代の彼女たちの「芸術」は重ね合わせられている。[15] 2016 年のキリル・サハルノフ＆クセーニヤ・サハルノヴァのドキュメンタリー映画『ナターリヤ・ゴルバネフスカヤ　わたしはヒロインではない』においても，冒頭で，自分たちの先駆者として 1968 年のゴルバネフスカヤたちの活動に言及するプッシー・ライオットのことを尋ねられたゴルバネフスカヤは「彼女たちにとってはそれが芸術なのでしょう。私は芸術なら息子のヨシフの絵の方が好き」とだけ答えている。

現代作家は市場メカニズムの中で読者に作品を届ける手段として，口コミや広告だけでなく，作家自身の登場するトレーラーであったり，出版社のつくる作家のホームページ，さらには作家自身の日誌ともいえるツイッターやブログなども活用しており，それらは彼らのツールとして欠かせないものとなっている。

---

11 Там же.
12 Там же.
13 *Горбаневская, Н.* Как пораждаются мифы // Континент. 2010. № 146. С. 330-336.
14 *Генис, А., Вайль, П.* 60-е. Мир советского человека. Изд. 3-е. М., 2001. С. 5.
15 マリア・アリョーヒナ（上田洋子監修，aggiiiiiii 訳）『プッシー・ライオットの革命 自由のための闘い』DU BOOKS，2018 年，151 頁。

1980 年以降にロシアで復活した回想録，日記などの個人的生活誌の出版ブームと意味についてイリーナ・パペルノは以下のように述べている。

> 1980 年代後半以降，回想録，日記やソ連社会における生活の他の個人的な報告は急激なスピードで出版されはじめている。それらのうちのいくつかは近年に書かれ，他のものは 1960 年代の「雪解け」期やそれ以前に遡る。多くは知識人によって書かれたが，労働者階級やほとんど文盲の著者によるものすらも同じく出版されている（当然だが知識人によって編集されている）。出版はグラスノスチ政策や，特にスターリン時代のテロルについて，ソ連時代の過去を明らかにするという政治的要求と一緒に進められた。1990 年代中頃までにこれらの努力は公的支援や公的な重要性を失った。しかし記憶の政治的言説が新聞の一面から消えたとしても，個人の生活の物語は出版され続けていた（今日に至るまで, 1990 年代や 2000 年代初頭ほど顕著ではないにせよ, 新たな文書が現れている）。学者たちはそれらを様々な用途ですでに使用している。[16]

パペルノは 1960 年代以降に書かれ地下で流通したセンセーショナルなヒットとして，1988 年に発表されたナジェージダ・ヤーコヴレヴナ・マンデリシュタームやエヴゲーニヤ・セミョーノヴナ・ギンズブルクの回想録を挙げている。[17] またアーカイヴ資料に基づき歴史を再現するという，現在の歴史家の常套的な研究手法も,「メモリアル」の死亡者名簿作成のような，収容所で亡くなった人々の情報を開示する活動と連動し，その調査はスターリン政権下で粛清されたミルスキーや，マンデリシュタームがどこでどのように死亡したかということについて明らかにしている。また「メモリアル」の活動の影響下に作成されたシベリア抑留・日本人抑留者名簿も存在している。

ゴルバネフスカヤは 1960 年代の反体制活動家の中でも特にインターネットにおけるブログを死ぬまで続けていた作家の一人である。作家はどのように死に，何を残すのかという点に関して，ゴルバネフスカヤは死んでも LiveJournal と Facebook (Галковский, 1998)を残しており，死後の保存という新たな問題を生み出している。

3. 「サミズダート–インターネット論」の系譜

「インターネットはロシアにおいてサミズダートとして先に出現していた」「イン

---

[16] Irina Paperno*, Stories of the Soviet Experience* (Ithaka: Cornell University Press, 2009, xi.
[17] Ibid. pp.1-2.

ターネットはサミズダートのメタファーである」という「サミズダート–インターネット」論はゴールヌィなどの論者に見られる。[18] この論から言えば，1960 年代のサミズダート／タミズダートの興隆と，現在の大統領候補の反体制活動家，弁護士でブロガーのアレクセイ・ナワリヌイのブログをはじめとする数多くの反体制的なブログを含むインターネットにおける作家活動は結び付けられる。

ポスピェロフスキーは帝政ロシアとソ連における検閲の質的差異について以下のように述べている。

> ソヴィエトとツァーリの文化政策のもう一つの本質的な違いは，革命前の作家が、作品を検閲官に禁止されても、原稿で流通あるいは国外出版されている場合、作家は自動的に迫害の対象とならないばかりか、ロシアでは検閲官が認可した他の作品の出版を妨げられることもなかった。[19]

ソ連において作家は，ソ連時代は国立出版局という唯一の出版機会を逃せば「引き出しのために書く」（писать в ящик）だけで，出版する希望もなく個人や数人の友人のために執筆するか，あるいは地下に原稿を流すか，1960 年代以降国外出版の道を多く選ぶようになっていた。フェルトブラッジの研究が示すように，統計によれば，1968 年がサミズダートの普及契機として大きな役割を果たしたということである。統計からフェルトブラッジは以下のような暫定的結論を引き出していた。

1. サミズダート出版は実際には 1966 年に始められる。
2. それは 1968 年に劇的に増加する。
3. 1968 年の水準は多かれ少なかれ次年度以降も引き継がれる。
4. 宗教・民族を理由とするサミズダートは 2，3 年早く始まっており，1968 年に急激な増加は見せていない。
5. ユダヤ人であることを理由とするサミズダートは後に始まり，1968 年以前は知

---

[18] Eugene Gorny, *Creative History of Russian Internet. Studies in Internet Creativity* (VDM Verlag Dr Müller, 2009).および *Накано Ю.* Самиздат как метафора интернета // Ценностные ориентиры современной журналистики: сб. науч. ст. III Междунар. науч.-практ. конф. (г. Пенза, 24-26 сентября 2015 г.) / под ред. доц. Е.К. Рева. Пенза: изд-во ПГУ, 2015. С. 66-70.を参照。

[19] D. Pospielovsky, “From Gosizdat to Samizdat and Tamizdat,” *Canadian Slavonic Papers* 20 (1978), pp. 45.

られていない。[20]

ソ連崩壊後環境は大きく変わり，検閲はむしろ内面化されたが，インターネットのハードの部分での検閲はニュースとして報道されている。ロシア国内で広く使用されている SNS「フコンタクチェ」あるいはオンライン百科事典 Lurkmore の管理者ドミトリー・ホマークと当局との軋轢は，ドゥーロフ兄弟の国外移住や，ドミトリー・ホマークのイスラエル移住を以て決着し、「フコンタクチェ」騒動はその後に彼らが作り，仮想通貨とともに人気を博した Telegram messenger のロシア国内使用禁止命令の訴訟問題として継続している。[21]

また「ソ連におけるインターネット」という歴史的経緯を示す「なぜソヴィエトはインターネットを作り出すことができなかったか」という「ソ連のインターネット」研究はベンジャミン・ピーターズのような研究者によりなされている。[22]

4. ゴルバネフスカヤの LiveJournal

2007 年 12 月 13 日の夜から死の前日の 2013 年 11 月 28 日まで LiveJournal の記録は続いている。2007 年 12 月 13 日から 14 日にかけての夜に初めて書かれていた。

> 一昨日，つまりまだ 11 日に，つまりもう一昨昨日の午後に客たちの前で（客については後述），私は LiveJournal で日記（journal， dziennik）をつけ始めると約束していた。（中略）そして昨日，もちろん，座って仕事に掛かっていた。仕事の結果，昨日と今日の午後（つまり一昨日と昨日の午後だけれど，私はまだ就寝していないので「昨日」というのはまだ今日である）にいくつかの手紙を書き，そしてまさにその一つが，もし注釈と解説を犠牲にしてでもいくらかそれを拡大するならば，私には日記のよい代わりになると思われた。私はまったく一度も日記のようなものは書いたことがないためになおさらで，かつて熱心に取り組んでいた書簡のジャンルはその後止めてしまい，E メールが登場してからまた

[20] F. Feltbrugge, *Samizdat and Political Dissent in the Soviet Union* (Leyden: A.W.Sijthoff, 1975), p. 12.
[21] *Накано Ю.* Самиздат как метафора интернета // Ценностные ориентиры современной журналистики: сб. науч. ст. III Междунар. науч.-практ. конф. (г. Пенза, 24-26 сентября 2015 г.) / под ред. доц. Е.К. Рева. Пенза, изд-во ПГУ, С. 69.及び *Бевза, Д.* Отец Telegram в изгнании:чем занимается Павел Дуров // *Газета.ru* [https://www.gazeta.ru/tech/2018/06/22/11790739/pavel_durov.shtml] (2019 年 11 月 14 日閲覧).を参照。
[22] P. Peters, *How Not to Network a Nation: The Uneasy History of Soviet Internet* (Cambridge: The MIT Press, 2016).

> 盛んに使うようになったくらいだから，私にとってははるかに自然なのだ。LiveJournal の日記の良いところは，自分のために書いているのではなく，読者のためだということが最初から明らかであるということだ。そしてこれが私にも適しているのは，私が「散文」を自分のためには書いたことがないからだ。[23]

日記が回想録と並んでペレストロイカ以降に多く出版されるようになったジャンルであるということはパペルノに言及しつつすでに述べた。その回想録や日記の出版・編集はゴルバネフスカヤのような知識人の仕事であり、彼女は 60 年代から 2000 年代に至るまで，サミズダートから亡命出版まで多くの編集に携わってきた。一方，ゴルバネフスカヤの作品の出版は記録的なものを除けば大多数は詩集で，彼女自身の講演にも見られるように，詩人と散文作家の二分法は彼女の中に存在していた。LiveJournal の執筆がゴルバネフスカヤにとっては「散文」の自分以外に向けられた「日記」であったということに注目しておくべきだろう。

SNS の記事には Authorship の問題があり，彼女自身が実際にその LiveJournal の文章を執筆していたのかという問題がある。これについては 2008 年の彼女の文章「私たちの民主主義の伝説：40 年後に」の中で彼女自身が言及している。

> 「自分の LiveJournal のメモに注釈をつけながら，リンクを出していませんでした。希望者はご覧になってください：ng68.livejournal.com」[24]

と記事の中でも言及されているために彼女が執筆していたことはほぼ間違いない。示唆的な「ng68」もある。SNS に関しての Authorship は最終的には著者本人に聞くしかわからない部分もあるが，前述したキリル・サハルノフ，クセーニヤ・サハルノヴァの映画においてもたびたび同じ「ng68」というアカウントのブログにゴルバネフスカヤが執筆しているシーンが存在する。また，2011 年に出版された著書においても，[http://ng68.livejournal.com/654638.html]というアドレスが掲載されており，本人の文章であることを示していた。

ゴルバネフスカヤが編集していた『現在の出来事の記録』という雑誌は，1968 年か

---

[23] *Горбаневская, Н.* December 14th, 2007 [https://ng68.livejournal.com/2007/12/14/] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[24] *Горбаневская.* Легенда нашей демонстрации. С. 180.

ら 1983 年まで全部で 63 号が出版されている。[25] 1969 年 4 月 30 日に出版された第 7 号に「『記録』の中の情報の信憑性と正確さについて」と題された文章が収録されている。

> 『記録』は伝えられる情報がもっとも信頼できるものであることを目指しています。なんらかの事件が起きたことについて完全な信頼を置くことができない場合は,『記録』では伝聞による情報と明記しています。しかしその際も『記録』は刊行に際して情報を伝えながら，読者に注意深く，正確であるように求めています。『記録』の部数が増えるにつれて一連の不正確さも生まれます。名前，苗字，日付，数字の間違いで，印刷を繰り返すたびにその数は増え，他の誤植のように意味を考慮しながら修正することはできません。[26]

この文章は 2014 年に Voice of America で公開されたアンドレイ・サハロフ財団とジャーナリストのナテーラ・ボルチャンスカヤの共同プロジェクト『パラレル・事件・人々』の第 4 集「サミズダートとインターネット」でも取り上げられている。この特集ではサミズダート出版に深く関わっていたアレクサンドル・ポドラビネク，編集者ニコライ・ウスコフ，ブロツキーとも関わりの深い研究者・出版者エドワード・クライン，政治家・編集者グレープ・パブロフスキー，ブロガーのアントン・ノーシク，退役した元国家保安委員会の少将で『ユコス』の元幹部だったアレクセイ・カンダウーロフに話を聞いていた。

1964 年のブロツキー裁判，1966 年のシニャフスキー＝ダニエル裁判という「文学裁判」の時期を過ぎ，多様に解釈可能な言語という相対主義的な立場は，亡命後のシニャフスキーが取るようなリベラルな響きのものであったが，ゴルバネフスカヤにとっては，1970 年 7 月 7 日の裁判で政府側に誤読されることによって精神病院で過ごし，亡命する羽目になったという過去を含んだ「ことば」でもあった。[27]

1970 年 9 月 5 日にゴルバネフスカヤによって書かれた「詩集についての声明」では，詩人としてではなく裁判の渦中にある「名前」としてのみ関心を持たれることの違和感を語っていた。

---

[25] *Б.п.* Хроника текущих событий [http://hts.memo.ru/about.htm] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[26] *Б.п.* О достоверности и о точности информации в выпусках «Хроники» // Хроника текущих событий, выпуск 7. 30 апреля 1969 года [http://hts.memo.ru/about.htm] (2019 年 8 月 15 日閲覧).

[27] 裁判については以下を参照。*Б.п.*. Дело Наталии Горбаневской // Новое русское слово. 29. 02. 1976. С. 2.

私は，私の政治犯としての状況が，最初に遭遇した私の詩に対する興味の理由であって欲しくはない。詩は大昔に捨てられたもので，見つければどこでも私が処分しようと考えていたにも関わらず，長い間誰かのもとでたまたま保管されていた。もし私の詩に対する興味が，私の名前だけでなく詩人としての私に対する興味であるならば，サミズダートや私の詩集を出版した出版社には，私の声明に真剣に向き合い，私が自分のものとは考えていない詩を拡散しないことを願う。[28]

サミズダートの出版者でもあったゴルバネフスカヤは裁判報道で彼女に対する関心が高まり，それゆえに詩人としてもはや大昔に捨てた作品が刊行され誤解されることを危惧していた。タミズダートではしばしば без ведома автора（著者の承諾なしに）といった文句とともに多くの作品が著者の承認を得ないまま掲載されていた。

2005 年 3 月 3 日にエヴゲーニー・チグリンと行われたゴルバネフスカヤのインタビューにおいて以下のようなやり取りがある。

―1983 年にミラノで雑誌『コンチネント』の国際会議で発表するときに，あなたが「亡命詩人の言語問題」というテクストを読み，さらに常に専門的に言語・文学研究者 филолог としてあなたが言語の発展に興味を持ってきたことを知っています。私たちの「デンマーク人」（ダーリのこと）についての論文が現れたのはその興味からでしょうか？私は素晴らしい論文だと思います。どのようにしてここに至ったのでしょう？

―理由の一つはすでに述べたように「言語・文学研究 филология」です。もちろん私は学問的な意味ではまったく言語・文学研究者ではありませんが，それでも言語・文学的な気質は私の胸をどきどきさせます。辞書は私の好きな本ですし，ダーリの辞書はその中でも好きなものです。もう一つの理由は，特にパリで私にインタビューでブロツキーが言ったことなのですが，「詩人の道具が言語なのではなくて，詩人が言語の道具なのだ」ということです。それからローセフがもっと滑稽に，おそらくもっと正確に表現しました。

そして，ユダヤ女がコサックに服従するように，
詩は言語に服従するのだ。

---

[28] *Горбаневская, Н.* Заявление по поводу книги стихов // *Горбаневская Н.* Побережье: стихи. Анн Арбор, 1973. С. 151.

> 一般的にスラヴ諸語はそうですが，特にロシア語は詩を生み出します。ちょうど今でも，本やもっと頻繁にインターネットで多くの馴染みの詩人や，以前は知らなかった詩人のたくさんの詩を読みながら，最も珍妙で新しい意味音 смыслозвук の組み合わせを織りなす言語の自由さに対して驚きはやむことはありません。[29]

またゴルバネフスカヤはオンラインでの文章をまとめて紙媒体に出版された文章の中で，オンラインでの彼女の文章に対する反応も収録し，それに対するコメントをつけながら 1968 年 8 月 25 日と現在を対比しようとする匿名のインターネットの著者たちを紹介している。

> これらはすべて今日私には特に重要だと思われる。多くのインターネットの著者たちは，デモについて語りながら，直接それを今日と比較しようとする。質問が出され，そして誰か（モデレーターか？）が回答を評価する otvet.mail.ru という奇妙なサイトでは，ユーザーの ВольноЙ раЙ が簡潔にデモについて語り（ついでにいえば，希少なレベルの豊富な知識で，8 名が参加していたと指摘していた），こう質問していた。「このような犠牲の用意がある人が今日いるだろうか？（中略）しかし，私は過去と現在の関係が「質問-回答」のレベルではなくて真剣に考察されている，より展開されたいくつかの引用を引いてみたいと思う。また私にとって重要なのは，これが「自分のために」「自分から」書かれたということである。[30]

ゴルバネフスカヤは「散文」と「詩」の二分法が意識的で，かつ「日記」として LiveJournal を捉えていたことは前述した。あくまで「自分のため」ではなく「読者のため」に書き，そのヴァーチャルな対話はあくまで「現実の対話」に対置される。記事の最後に，ゴルバネフスカヤは，架空の若者たちのコメントに注釈をつけながら，その文章をスロヴァキア文化センター長との会話で終えている。ゴルバネフスカヤは架空の著者たちのコメントのリンクを忘れ，あとがきで自らの LiveJournal のアドレスを示していた。

---

[29] *Горбаневская, Н.* Прозой о поэзии и поэтах. М., 2011. С. 272.
[30] *Горбаневская.* Легенда нашей демонстрации. С. 177.

さいごに

1983 年の「亡命詩人の言語問題」と題された講演では，ゴルバネフスカヤは「アメリカや特にヨーロッパに住むロシア人散文作家の半分以下，ロシア人詩人の半分以上は，彼らが居住する国の言語を話している」という「興味深い観察」を紹介している。[31] ゴルバネフスカヤは LiveJournal 以前は日記をかかず，それ以前は散文はポーランド語やフランス語から翻訳するもので,「自分のため」に書かれるものではなかった。詩人と散文作家の外国語についても，そこで語られているのはあくまで「散文作家」ではない「詩人」としての自分自身の矜持だけでなく,「自分のため」に日記を書かない作家としての自意識でもあった。1960 年代の裁判と誤読の恐怖を経験したゴルバネフスカヤは，失敗作の流通を恐れる一方で，流通に伴う誤読が不可避なことも熟知しており，家宅捜索の際に証拠として押収される日記の危険性も熟知していた。多くの同時代的な知識が失われ，LiveJournal 上でのやり取りを眺めながら，コメントをつけることがゴルバネフスカヤの最後の日課となり，1968 年 8 月 25 日の 45 周年のデモ行動に参加しつつも彼女自身が逮捕されることはなかったという事実も当局との関係の変化を示していた。書き残された紙媒体がアーカイヴに収蔵される一方で，ゴルバネフスカヤのオンライン上での文章は現在もそのままで日付とともに検索可能な状態で開かれている。60 年代から 2000 年代にかけての政治的な変化やメディアの進化，それを一方では傍観しながら参加し，その虚栄と将来性を体現していた作家として，ゴルバネフスカヤは現代作家の来るべき問題を身をもって示していたと考えられる。

«Самиздат и Интернет – Наталья Горбаневская в LiveJournal»

НАКАНО Юкио

В данной статье рассматривается творчество русской поэтессы Натальи

[31] *Горбаневская, Н.* Языковые проблемы поэта в изгнании // *Горбаневская Н.* Прозой о поэзии и поэтах. М.: Русский Гулливер, 2011. С. 267-270.

Горбаневской в Живом Журнале. Наталья Горбаневская широко известна как одна из участников демонстрации на Красной площади против вторжения советской армии в Чехословакию 25 августа 1968 года. В 60-е годы она работала в редакции журнала «Хроника текущих событий», который сообщал об арестах и процессах диссидентов. 24 декабря 1969 года она была арестована и отправлена на принудительное лечение в Казанскую психиатрическую тюрьму. Она была освобождена 23 февраля 1972 года и вернулась в Москву на следующий день, но ее заставили ждать три года, пока она смогла уехать. В 1975 году она с двумя сыновьями эмигрировала в Париж. Во Франции она работала в редакции журнала «Континент» и в редакции газеты «Русская мысль». Она скончалась 29 ноября 2013 года в Париже и похоронена на кладбище Пер-Лашез. В интервью в 2011 году она говорила о том, что она родилась без отца и жила с матерью-одиночкой и она сама тоже как мать-одиночка родила двоих детей без мужа. Она обратилась в православную веру в 1967 году. Но из-за ее еврейского происхождения от нее требовали подачи прошения о визе в Израиль.

Согласно мнению Гениса и Вайля, в 1960-х годах мы до сих пор находим «источники почти всех перестроечных новаций». В ее последние годы демонстрантов 1968 года сравнивали с группой «Pussy Riot». В фильме Ксении и Кирилла Сахарновых «Наталья Горбаневская: я не героиня» (2016) на вопрос об отношении демонстрации 1968 года к делу «Pussy Riot» Горбаневская отвечает, что, если их акции считаются искусством, то она больше любит картины ее сына Иосифа Горбаневского.

После появления Интернета самиздат считается одной из главных метафор русского Интернета. Большинство писателей до сих пор активно используют его как способ самовыражения. Горбаневская никогда не вела дневник. Но она вела свой дневник в Живом Журнале с 14 декабря 2007 года по 28 ноября 2013 года, за день до ее смерти. На основе высказываний Горбаневской анонимные интернет-авторы поделились своими мнениями о сравнении демонстрантов 25 августа 1968 года и сегодняшних людей.

В заключении мы пришли к выводу, что интернет-дневник в Живом Журнале до самой смерти Горбаневской оставался открытым и был всегда рассчитан на анонимных «читателей». Она не стремилась высказаться «для себя». Дихотомия прозы и поэзии тоже имеет важное значение в творчестве Горбаневской. Она как русская поэтесса никогда не вела дневник как прозу. Она не столько писала прозу, сколько переводила ее на русский с французского и польского. И на такой выбор воздействовало ее прошлое.